

此世の事はとてもかくても候

——『一言芳談』なま女房の章・私注——

森 下 要 治

はじめに

小林秀雄の「無常といふ事」が、十三世紀末から十四世紀前半の成立とされる仮名法語『一言芳談』の中の、彼を鎌倉時代の一夜に誘い込んだ次の一節に始まることは、よく知られている。

有云く、「比叡の御社に、いつはりて、かんなぎのまねしたる、なま女房の、十禪師の御前にて夜うち深けて、人しづまりて後、ていとうく」と、鼓をうちて、心すましたる声にて、『とてもかくても候。なうく』とうたひけり。其心を人にしひ問はれて云く、『生死無常の有様を思ふに、此世の事はとてもかくても候。なう後世をたすけたまへと申すなり』云々^①。

そして、この一節をきっかけとした小林の思索は、次のように結ばれている。

上手に思ひ出す事は非常に難かしい。だが、それが、過去から未来に向つて餚の様に延びた時間という蒼ざ

めた思想（僕にはそれは現代に於ける最大の妄想と思われるが）から逃れる唯一の本当の有効なやり方^②の様に思える。成功の期はあるのだ。この世は無常とは決して仏説という様なものではない。それは幾時如何なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状態である。現代人には、鎌倉時代のなま女房ほどにも、無常という事がわかつていない。常なるものを見失つたからである。

引用文中の「動物的状態」とは、「死んでしまつて」「まさに人間の形」をした人間になる前の、すなわち「人間になりつつある一種の動物」であるところの「生きている人間」を指しているらしい。「現代人」は、「常なるもの」つまり死んでこそ立ち現れる「退つ引きならぬ人間の相」を「見失つた」のだから、「鎌倉時代のなま女房ほどにも、無常という事がわかつていない」のだという。小林の思索の筋道を追つてみれば、「鎌倉時代のなま女房」は、辛うじて「常なるものを見失つ」てはいなかったというのであろう。

その当否は措くとしても、小林をこうした思索に誘った鎌倉時代のなま女房の振る舞いを語る冒頭の一節がさまざまに想像をかきたてるものであることは疑いない。本稿は『一言芳談』に置かれたこの短章に拘って、中世人の心性の一端を探ってみたい。

この短章には「なま女房」という主人公や「比叡の御社」「十禅師の御前」という舞台など、読む者の目を引く言葉があるが、差し当たって、まずは「鼓」について考えることにする。

一 「ていとう」と、鼓をうちて」

「かんなぎ」のまねをしたなま女房は、「ていとう」と、鼓をうちて」「心すましたる声にて」歌ったという。鼓を打って歌う場面で直ちに浮かぶのは、後白河院撰述の『梁塵秘抄口伝集』巻第十の次の一節であろう。

明け方に返し遣りても、なほ歌ひしを、かねが局、
対へなりしかば、明けてのちもなほ鼓の音の絶えぬさ
まに、「いつの暇にか休むらん」とあさみ申しき。

遊女を出自とする「神崎のかね」が、鼓の音に合わせて今様を歌い続ける院の様子に「いとお休みになるのか」と呆れていたという。『梁塵秘抄』巻第二（三八〇番）には「遊女の好む物、雑芸 鼓 小端舟 箏 翳 臚取女 男

の愛祈る百大夫」⁽⁵⁾ともあって、今様の主たる歌い手が遊女であることを思い合せれば、鼓が今様の伴奏楽器であったことを確認できるだろう。なお、西郷信綱氏は、この歌に関わって次のように指摘し、今様における言葉（詞章）の重要性について述べている。

今様が鼓という単純な打楽器のみの伴奏であった点は、うっかり見のがすべきでない。ヒチリキ・笙・横笛・琵琶・箏等の楽器を用いる催馬楽などに比べ、これは、今様では言葉が主で、音楽が従であったこと、またその旋律がよほど自由であった消息を示すものといえる。⁽⁶⁾

また、鼓の音が「ていとう」と擬せられることは、『梁塵秘抄』巻第二（二六五番）にやや異なる形で、
金の御嶽にある巫女の。打つ。鼓、打ち上げ打ち下ろし面白や、我等も参らばや、ていとうとも響き鳴れく。打つ鼓、如何に打てば此の音の絶えせざるらむ

とある例、さらに時代はやや下るものの、謡曲「雨月」に「颯々の鈴の声、ていとうと打つ波の、鼓も同じ瀧祭の…」、同「逆矛」に「岸打つ波も松風も、颯々の鈴の声、ていとうの鼓の音」、同「住吉詣」に「颯々の鈴の音、ていとうの鼓の声々に…」などがある類例を確認できる。

今様に鼓を伴うことを必要としたのは、『とはずがたり』

卷二の今様伝授の場面で、四条（善勝寺）隆顕が具してきた白拍子二人が歌う場面にもよく表れている。

姉は春菊、妹若菊といひき。白拍子少々申して、立姿御覧ぜられんといふ御気色あり。「鼓打ちを用意せず」と申す。そのわたりにて鼓を尋ねて、善勝寺これ⁷を打つ。

「鼓打ち」を連れてこなかったことがわざわざ語られ、また殊更に「鼓を尋ね」出したのは、今様伝授の場にそれが必要であったからである。改めて述べるほどではないが、冒頭の「一言芳談」のなま女房の話で「鼓」を伴って歌われた「とてもかくても候。なうく」という詞章は、今様のごとき旋律を伴うものであった、あるいは今様の一部であったと考えると間違いない。

一方、「鼓」への注目はなま女房の姿形とも結びついてくる。黒田日出男氏は『姿としぐさの中世史』⁸において「巫女のイメージ」の一章を立てて、『春日権現験記絵』『年中行事絵巻』『石山寺縁起』などの絵と詞書によって、巫女と認められる人物が鼓を持っている、あるいは打っている姿を拾い上げられている。『梁塵秘抄』でも、先に引用した「金の御嶽にある巫女」の打ち鳴らす鼓の歌（二六五番）や同巻第二（四七一番）「寝たる人打ち驚かす鼓かな、如何に打つ手の懈かるらん 憐しや」などに、巫女の打つ鼓の音が歌われている⁹。鼓は、なま女房が「いつわりて」その真

似をした「かななぎ」すなわち巫女の持ち物として相応しいものであったろう。

こうして資料を確認すると、たとえ「いつはり」であったとしても、鼓を打ち鳴らしつつ「心すましたる声」で今様を歌う姿が巫女らしく描かれる「なま女房」とは何者なのか、考えておくべきであろう。それは、今様の歌い手である傀儡子や、やはり鼓を打って今様を歌うものとされた白拍子など、芸能に通じ、広く「遊女」とみなされた存在だったと考えるべきではないか。¹⁰「なま女房」とのみ記される「いつはりて、かななぎのまね」をした彼女の心性に焦点化して、検討を続けてみたい。

二 「とてもかくても候。なうく」

このように、なま女房が巫女の真似をして鼓を打つ様子がいかにもそれらしさを湛えたものであったことが確認できるが、それでは彼女が歌った今様（またはその一部）と推定される詞章「とてもかくても候。なうく」はどうか。現存する『梁塵秘抄』にこのままの形の詞章はなく、またさまざまな文献に散見する今様でも確認できない。

そこで、和歌に確認の範囲を広げると、直ちに「とてもかくても」の句を有する『和漢朗詠集』巻下「述懐」七六三番歌（『新古今和歌集』雑下・巻軸・一八五一にも）を挙

げることができる。

世の中はともかくても同じこと宮もわら屋も果てしなければ¹¹⁾

作者が蟬丸に仮託されるこの歌を起点として、その影響下にある、例えば次のような和歌を確認できる。¹²⁾

『新古今和歌集』

山のはに思ひも入らじ世の中はともかくてもあり
あけの月（雑上・題しらず・藤原盛方朝臣・一五〇八）
数ならぬ身をなにゆへに恨みけんともかくても過
ぐしける世を（雑下・題しらず・大僧正行尊・一八三
四）

『山家集』

ながらへてつひに住むべき都かはこの世はよしやと
てもかくても（雑・是もついでに具してまゐらせけ
る・一二三二）

『拾玉集』

世の中はともかくてもありぬべしといひし人の心
をぞ知る（第一・百首 述懐・一一八）

善し悪しを思知る人ぞ難波潟ともかくても世に有
がたき（第二 賀茂百首・雑三十首・二三八五）

世の中はともかくても浅緑思し空は春のあけぼの
（第三 難波百首・二八一五）

世の中にとてもかくてもあらぬはともかくても

有にぞありける（第四・不^レ悟^二露命、徒咽^二江涙、悲
哉愚哉。知而如^レ不^レ知、迷而所^レ不^レ迷、愚哉云々・
五〇四八）

これらを見てもわかるように、「とてもかくても（あり・
過ぐす）」という印象的な句を受け継ぎながら、「世の中」
「世（よ）」「この世」等の語句が同時に用いられている。歌
の心を問われた『一言芳談』のなま女房は「此世の事はと
てもかくても候。なう後世をたすけたまへと申すなり」と
答えたが、その答えの前半部分がこれら和歌の世界の表現
と同一線上にあることは疑いない。「とてもかくても」とい
う表現は、「世の中は……」という蟬丸仮託の和歌の記憶と結
びついて、「今生」の不如意や不条理、はかなさや無常を吐
露するに相応しいものと考えられていたであろう。しかし、
彼女の思いは「とてもかくても候」の部分だけでなく、「な
うく」としか歌われなかった部分、すなわち答えの後半
の部分「なう後世をたすけたまへ」の方にも同様に込めら
れていたはずである。いま一度『一言芳談』に戻って、こ
のことを考えてみたい。

『一言芳談』には、「往生という至上の目的」に向かう
「強烈な意志」¹³⁾が認められるという。なま女房の「後世をた
すけたまへ」という言葉も、同じ意志に裏打ちされたもの
として編者に認められ、『一言芳談』に採録されたものであ
ろう。彼女の言葉と関わる表現として、『一言芳談』には次

のような法語がある。

又云く、「後世をたすからんとおもはんものは、かまへて人目にたつべからざるものなり。人をば人が損ずるなり。聖法師の、今生に徳をひらく事は、大略、後世のために捨て物なり。」

法然没後に浄土宗に帰依した明禪法印の言葉として記されたもの。「後世をたすか」るために「今生」での「徳」は捨てよと教えている。「今生」と「後世」を対比させて述べる語り口は、「なう後世をたすけたまへ」というなま女房の自歌自解と同じ発想に基づくものと言えよう。ただこの言葉は、「なう」という呼びかけと言い、「たすけたまへ」という請願と言い、その願いの向かう先がなければならぬ。「一言芳談」の中からは、願いの向かう先を明確に言い表したのも、次のように示すことができる。

・「仏」に救いを求めるもの

又云く、「たとひ八万の法門を通達せりとも、凡夫の位には程あやまちあるべし。仏助け給へとおもふ事のみぞ、大切なる。」

又云く、「『仏たすけ給へ』と思ふ心を、第一のよき心にてあることを、真実に思ひしる事、人ごとになきなり。」

同上人最後の所労の時云く、死後三日以前「僧都御房の、『仏助け給へ』と思ふ外は、要にあらず」と被_レ仰

れし事、もさしもやと思ひしが、今こそおもひしらるれ。：」

・「阿弥陀仏」に救いを求めるもの

又云く、「あの阿波介が念仏も、源空が念仏も、またくもて同念仏なり。『助給へ阿弥陀仏』と思ふ外は、別の念を發さざる也。」

聖光上人云く、「辨阿は、『助給へ、阿弥陀仏』と心にも思ひ、口にもいふなり。」

又云く、「凡浄土宗の元意、『たすけ給へ、阿弥陀仏』と思ふにすぎず。」

これらの例に共通するのは、「仏」「阿弥陀仏」にひたすら縋り「助け給へ」と思い念ずることの重要性が語られているという点である。いずれの例も「たすけたまへ」を「と思ふ」と承けていることから、思い念ずることが重視されているとわかる。これらの例を踏まえれば、先のなま女房が「なう」と呼びかけ「たすけたまへ」と求めた先に「仏・阿弥陀仏」が幻視されていた、あるいは、なま女房はその出現を体験すべく歌いかけていたとの認識が『一言芳談』の編者にはあったと考えておかねばならない。

その上で、なま女房の「たすけたまへ」が他の例と異なっているのは、そうした思念が彼女を突き動かし、実際の行動（歌）として顕れた様を描いていることである。そのことによって、このなま女房の章が単なる法語としてで

はなく、あたかも説話の一場面を見るような鮮やかさを有する話となり得ているのは疑いない。それは、月の照り映える夜、少将聖の舟に我が舟を寄せ、「くらきより闇き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月」と吟じた室の泊の遊女を彷彿とさせる。また、夜更けの杜前に響く鼓の音を聞きとがめた者に止められることがなければ、なま女房の歌はさらに切々と続いたはずである。その切なる願いは、鉦を叩きながら「阿弥陀仏ヨヤ、ヲイ〜」と高唱して西を指した源大夫にも比すことができたかもしれない¹⁵。

以上のように資料をたどってみれば、なま女房の振る舞いは、現世の、あるいは己が身の上のはかなさや不条理を省み、仏に向けて極楽往生を切に願い、それを行動として表したものであったと確認できる。

三 「十禪師の御前にて」

神仏の宝前は、今様（歌）が歌われるにふさわしい場所だったようである。『古事談』には、次の説話を載せる。

恵心僧都、金峯山に正しき巫女有りと聞きて、只だ一人向はしめ給ひて、「心中の所願うらなへ」とありければ、歌占に、

十万億の国々は、海山隔てて遠けれど、心の道だになほければ、つとめていたるところそきけ

と占ひたりければ、啼泣して帰り給ふ、と云々¹⁷。

恵心僧都の問いかけに対し、巫女は今様の形をとった歌占で答える。場所は金峯山で、当面問題としているなま女房の話とは直接関わらないが、「正しき巫女」との記述が「いつはりて、かななぎのまねしたる」と語られるなま女房の場合と対照的であることは興味深い。また、先に引用した『梁塵秘抄』二六五番歌に「金の御嶽にある巫女の。打つ。鼓。：」と歌われていることからわかるように、恵心への答えの今様も鼓の伴奏で歌われたと考えられ、この点、なま女房が歌った場合と同様であったと言える。

一方、「十禪師」はどうであろうか。『一言芳談』には他に十禪師を舞台とする話は見えないが、他書で探すと、『発心集』第四「日吉の杜に詣づる僧、死人を取り棄つる事」を見出すことができる。その概要は次のとおりである。

「こともなき僧」が日吉神社に百日詣での途中、八十日余りの帰り道に、今朝母を亡くしたという女に出会う。弔いの相談をできる相手もなく途方に暮れているさまを見かねた僧は死穢も省みず女を助ける。死穢は百日詣での障りであるが、八十余日まで積んだ功を諦めきれず、僧は身を浄め、心を強くして翌日も日吉に詣でた。

参りつきて見れば、二の宮の御前に、人、所もなく集まれり。ただ今、十禪師の、巫に憑き給ひて、様々のことをのたまふ折節なり。この僧、身のあやまりを

思ひ知りて、近くはえ寄らず、物がぐれに遠く居て、かたの如く念誦して、日をかかぬことを喜びて、帰らんとするほどに、巫はるかに見つけ、「あそこなる僧は」といはれて、心おろかなるやは。

僧は恐れながら、「かんなぎ」の前に進み出る。

近々と呼び寄せて、のたまふやうは、「僧の夜んべせしことを明らかに見しぞ」とのたまへるに（中略）「汝恐るることなかれ。いしくするものかなと見しぞ。我もとより神にあらず。憐れみの余りに、跡を垂れたり人に信をおこさせんがためなれば、ものを忌むこともまた、仮の方便なり…」

僧の前夜の行いを言い当てた「かんなぎ」は、恵心僧都の説話に見えた、金峯山の「正しき巫女」の類であろう。この『発心集』の説話からは今様が歌われた形跡は見いだせないが、その一方で「我もとより神にあらず。あはれみの余りに、跡を垂れたり」との言葉は見逃せない。これは、十禅師の神が自らの来歴を語ったものである。

鎌倉時代成立の山王神道に関する書『耀天記』の「十禅師宮事」には、次の説が記される。

成仲説云、中古横川ノ香積寺十人供僧中^ニ、一人知行兼備高德人在^{シテ}、十禅師ノ中ノ其一人、現身^ニ山王ト語言^ヲ申通^{ズル}人、荒人神ト成給^{ヘリ}、仍十禅師ト申也^ト、

恐らくはこの記述に基づいて、村山修一氏は次のように

説明している。

比叡山横川に香積寺と称する小堂があり、その十人の供僧中に智行兼備の高僧で十禅師になった者がおり、日吉社の神と話ができ、その人が荒人神になったものを十禅師神としてまつたと伝えられる。つまり巫祝的な僧を神格化したもので十禅師は巫祝神であり、日吉社全体を代表して託宣し、あるいは神罰を下すほどの権勢神であった。

また、同じく『耀天記』には、次のような説も見え、十禅師社の慈悲广大を説き、弥勒菩薩あるいは地藏菩薩と同一体としている。

…況ヤ十禅師ト申ハ、慈悲广大ノ神ニテ御セバ、仰ゲバ彌ヨ
クイツクシミ深シ、信スレバ旁メグミ廣シ、七社ノ利益ヲ我一人トホドコシ、一切衆生ヲ我一人トカナシミ給ヘリ、依レ之光ヲ和^ゲ給事ヒトシナ、ラズ、或ハ甫処ノ弥勒ト示^テ、如意宝殿ノ恵日ヲ出^{シテ}、光ヲ末代ノ空ニカヤカシ、或ハ付属ノ地藏ト現^{シテ}、伽羅陀山ノ覺月ヲラヒテ、影ヲ濁世ノ水ニウカベ給フ、地藏ニテモ弥勒ニテモ、利生ハカリゴトハ不^レ可^レ疑^ト、

十禅師社は、なま女房がその社前にて、「なう後世をたすけたまへ」と切なる願いをささげるに相應しい神であったと言ふことができる。

さらに、時代が下る資料ではあるが、やはり山王神道に関する書と言われる『厳神鈔』には、「千観内供祈精十禅師^{（マメ）}

時御託宣事」と題する一節がある。⁽²¹⁾ ここでは「千観内供記云」として、千観が「為祈今生榮耀、参詣日吉十禪師」したところ「霊夢」を得たこと、また重ねて十禪師に詣でて「祈念往生業因」したところ、十禪師権現が「参詣ノ少女」によつて託宣したと言う。千観内供と言えば、早く『日本往生極楽記』第十八にその往生の様が記され、また『発心集』第一「千観内供、遁世籠居の事」には、空也上人に「後世助かる事」を尋ねる様が描かれる（『私聚百因縁集』『三国伝記』にも）。「今生」を離れ「後世」に救われることを求める『一言芳談』のなま女房の姿は、十禪師という場を媒介として、著名な往生者と重なり合っていると言つてもよい。

四 「なう後世をたすけたまへ」

『沙石集』巻第一ノ六「和光の利益の事」では、十禪師社の本地仏が地藏菩薩であることを述べた後に、次のような一文が続く。

とてもかくても、人身を受けたる思ひ出、仏法に会へるしには、一門の方便にとり付きて、出離を志すべし。⁽²²⁾

「人身を受けたる思ひ出」、「仏法に会へるし」とは、いずれも人の「今生」を指して言っている。そして「出離

を志す」すなわち生死輪廻の迷いの世界を離れることを志すことは、まさに後世を願うことでもある。このような論理の運びが、「今生」に関わつて、まず「とてもかくても」と語り始められるのは、「生死無常の有様を思ふに、此世の事はとてもかくても候。なう後世をたすけたまへ」となま女房が解いた歌の心ときわめてよく似たものと言わねばなるまい。しかし、本稿冒頭に触れた「無常といふ事」において小林秀雄が「この世は無常とは決して仏説という様なものではあるまい」と看破したように、なま女房の振る舞いは、より生々しい肉感を帯びたもののように思われる。

先に、「くらきより」の歌を吟じて少将聖に結縁した室の泊の遊女の説話に言及したが、これと同趣の説話が、例えば『法然上人行状絵図 第卅四』に、法然の乗船に推参する遊女の話として見える。

遊女申さく、「上人の御船のよしうけたまはりて推参し侍なり。世をわたる道まち／＼なり。いかなるつみありてか、かゝる身となり侍らむ。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世たすかり候べき」と申しければ、上人あはれみでの給はく、「げにもさやうにて世をわたり給らん、罪障まことにかるからざれば、報酬またはかりがたし、もしかゝらずして、世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわざをすて給べし。もし余のはかりごともなく、又身命をかへりみぞ

るほどの道心いまだおこりたまはずば、たゞそのまゝにて、もはら念仏すべし。弥陀如来はさやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ。たゞ、ふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ。本願をたのみて念仏せば、往生うたがひあるまじき」よし、ねんごろにをしへ給ければ、遊女隨喜の涙をながしけり。

傍線部の「この罪業おもき身：のちの世たすかり候べき」は、先に検討したように、「罪業おもき身」すなわち今生を省み、「後世」の救いを対比させて述べる語り口と一致する。しかし、ここで注意を払っておきたいのは、この室の泊の遊女の説話の直前に、播磨国高砂の浦の海人の老夫婦が法然に結縁する説話が置かれていることである。「ものゝ命をこらすものは、地獄におちてくるしみたえがたく侍なるにいかがしてこれをまぬかれ侍るべき。たすけさせ給へ」という老海人の嘆きに、法然は「汝がごとくなるものも、南無阿弥陀仏となふれば、仏の悲願に乗じて浄土に往生すべき」と教え諭す。

つまり『法然上人行状絵図』においては、殺生を生業とする「海人」の説話と「遊女」のそれとが、いずれも法然との結縁を求める話柄として隣り合わせて並べられていることになる。この二話が並べられているのは、単なる偶然と言い切れない。例えば十四世紀初頭成立の『普通唱導集』

卷上 本二 世間部にはやはり「遊女」と「海人」の表白文例を並べて掲げている事例²⁴を挙げることができるよう、芸能の徒として春を鬻ぐこともある遊女と、漁撈を生業として日々殺生を重ねる海人との間には、恐らく「罪業」としての類縁性が認められていたと考えるべきではないか。

まず、『一言芳談』のなま女房の素性と思われる遊女の罪業がいかに理解されていたか、確認しておく。

『梁塵秘抄口伝集』には、有名な今様往生論と呼ばれる一節がある。今様を歌つても極楽往生の妨げにはならぬはず、としたうえで、

その故は、遊女のたぐひ、舟に乗りて波の上に浮び、流れに棹をさし、着物を飾り、色を好みて、人の愛念を好み、歌を歌ひても、よく聞かれんと思ふにより、外に他念なくて、罪に沈みて菩提の岸にいたらむことを知らず。それだに、一念の心おこしつれば往生しにけり。

と述べ、「まして我らは」と続けている。傍線を施した諸々のことが、「遊女のたぐひ」が「罪に沈」む理由となるものなのであろう。『梁塵秘抄』には先にも引用した三八〇番歌に「男の愛祈る百大夫」とあったように、人（男）の恋愛の対象となることが、「遊女の好む物」として、またその罪として数えられている。さらに、ほかにも次のような歌もある。

盃と鵜の喰ふ魚と女子は、法無きものぞ去来いざ二人寝
ん (四八七)

「法無き」の部分には諸説があるが、ここの「女子」については「好色（美女の意）」（新潮日本古典集成）、「妻女でなく、宴席に侍る女」（新日本古典文学大系）と、表現は異なるが理解の方向性はほぼ一致している。鵜が捕らえる鮎を酒肴に盃を交わし、そしてその先の性愛の悦びへと男を誘う「女子」の姿を彷彿とさせる。

ところで、この歌において、酒肴として「鵜の喰ふ魚」が取り立てられることには特に注意を払っておくべきである。この表現の背後には、当然ながら鵜飼の業が想起されていたはずである。古来、漁撈のうちでもことに哀れを誘うものとされたのは、おそらく鵜飼である。『梁塵秘抄』にも鵜飼を直接に歌った著名な今様二首がある。

鵜飼は憐しや、万劫年経る亀殺し 又鵜の頸を結び、
現世は斯くても在りぬべし、後生我が身を如何にせんあ

(三三五)

鵜飼は悔しかる、何しに急いで漁りけむ、万劫年経る
亀殺しけむ、現世は斯くてもありぬべし、後生我が
身を如何にせん、ずらむ (四四〇)

頸を結わえた鵜を使って鮎を獲るばかりでなく、鵜の餌にするためには齡万年の亀を殺す鵜飼は、生あるものに対して何重にも殺生の罪を重ねているとされた。この二首は

恐らく歌い替えの関係にあるだろうが、両者とも鵜飼を第三者の視点で観察し、その「現世」の生を「斯くても在り」、そしてその諦めにも似た生き様を「後生（後世）」への深刻な不安へと繋げる論理は共通している。こうした思考の運びが『一言芳談』のなま女房の歌の心と通じ合うことは明らかである。「後生（後世）我が身を如何にせん」という鵜飼の嘆きは、翻って「なう後世をたすけたまへ」という救いの祈りへと繋がったであろう。それはそのまま、なま女房の祈りでもある。

おわりに

『一言芳談』中の一話を追いかけてならなま女房と鵜飼との淡い関わりに逢着することとなった。しかし、これは偶然のことではない。ここまで述べ来った話題からは時代が下るし、またいわゆる「遊女」とは呼べないが、鵜飼と春を繋ぐ生業との関わりを論じたのは網野善彦氏であった。

諸国の鵜飼を広く一覽しつつ、鵜飼の社会的分業の位置づけが低下していくことを示し、山城国・桂の鵜飼集団の女性である桂女の「遊行女婦」すなわち遊女としての性質にも言及している。その検討の途次において謡曲「鵜飼」にも話が及んでいるが、この謡曲「鵜飼」をより焦点化して論じ、その罪業意識の所在の深層にまで論を及ぼしたのは

横井清氏であった。²⁷⁾横井氏の指摘は、謡曲「鵜飼」の前シテの翁(亡霊)にとつては仏法における戒律以前の、我々文学の研究に携わる者にとつては研究における実証以前の、より重要な示唆を与えてくれるように思われる。

横井氏は、謡曲「鵜飼」の梗概を示したうえで、『梁塵秘抄』、『平家物語』の詞章や記述と照らし、西郷信綱氏や林家辰三郎氏、加藤周一氏等の論にも周到に触れながら、前シテである翁(亡霊)が旅僧の求めで鵜飼を演じた際の地謡が繰り返す「面白や」に関わつて次のように述べている。長くなるが引用する。

むろん、その「面白さ」は「殺生をするはかなさ」というものと表裏一体の所感として作品の中に位置づけられるが、「はかなさ」の方は殺生戒が教えたことであつて、さらなる根源に息衝くのは、鵜飼いの営みを通じての「殺生」の愉悅なのである。捕鳥も、魚の漁も、四足獣の猟も、それぞれに携わる人びとにとつては、まず第一にその営みが己が心に愉悅をもたらすものであつたことを、私は直視したい。(中略)

しかしながら、その「殺生」における愉悅の問題などということには、私たちは得てして目を逸らしがちであつたし、こんにちもなおそうである。人として堅持すべき一種の「倫理」観が、過去における「殺生」の問題の考察に際しても自ずとそれを避ける皮膜を私

たちの眼球にもたらしがちなものではあるまいか。もしそうだとしたら私たちは、「殺生」によつて日々を生きていた膨大な数の人びとの心性、そのほんの一部分しか垣間見てはいないということにもなるう。²⁸⁾

横井氏の「殺生の愉悅」に倣つて「愛念・愛欲の愉悅」「自分の歌で人を魅了する愉悅」などと言つつもりはない。しかし、「遊女」たちの生業の中で、第一義的には仏法の教えから外れたものとされる自らの営みそのものが、身体的な実感を伴つて悦びをもたらすことを経験しない者はいなかったのではないか。そのことは、先に引用した「遊女のおむ物、雑芸 鼓 小端舟 簗 翳 鱸取女 男の愛祈る 百大夫」や「我を頼めて来ぬ男、角三つ生いたる鬼になれ、さて人に疎まれよ……」(三三九番)²⁹⁾等の『梁塵秘抄』所収の今様から十分に推測できる。そして独り静かに自分の経験を振り返るとき、仏法の教えと引き合わせて彼女たちを苛む罪業感が一層重く自らの今生を顧みさせることになつたであろうことは、容易に想像し得る。³⁰⁾『一言芳談』のなま女房が「とてもかくても候」と自歌自解する「此世の事」のうちには、愛欲の快さや無心に歌う楽しさに身をゆだねた日常への悔恨が揺蕩しているのではないか。そして、それが「なう後世をたすけたまへ」という彼女の願いをいっそう切なるものとしているのであらう。

「この世は無常とは決して仏説という様なものではあるま

い」と述べた小林秀雄の見立てが正しければ、なま女房が観じた「生死無常の有様」とは、仏説が教える仏の救いへの願い以前に、生身に刻まれた悦びが今生への後悔を鋭い苦しみとして彼女に自覚させたものではなかったか。そしてその苦しみに、鼓の音を伴い今様の旋律に乗せて歌われる「とてもかくても候」という詞章ほど相応しいものはないはずである。

注

- (1) 引用は小西甚一氏校注『一言芳談』（一九九八年、ちくま学芸文庫）による。以下同じ。
- (2) 引用は『小林秀雄全作品14 無常という事』（二〇〇三年、新潮社）による。
- (3) 本稿同様にこの短章を取り上げて分析した中路正恒氏「玉依姫という思想——小林秀雄と清光館——」（もと『東北学』第一号（一九九九年一〇月、作品社）。二〇〇三年六月にH T M L 化されたテキストにより参照）があるが、『一言芳談』の編者の想定」から切り離してこの短章を論じようとしてされており、本稿が目論むところとは異なっている。
- (4) 引用は馬場光子氏『梁塵秘抄口伝集 全訳注』（二〇一〇年、講談社学術文庫）による。以下同じ。
- (5) 引用は新日本古典文学大系『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（一九九三年、岩波書店）による。以下同じ。
- (6) 『梁塵秘抄』（二〇〇四年、ちくま学芸文庫）。
- (7) 引用は新潮日本古典集成『とはずがたり』（一九七八年、

新潮社）による。

- (8) 一九八六年、平凡社イメーजीリーディング叢書。のち、平凡社ライブラリーに収録。

- (9) 植木朝子氏『梁塵秘抄』（二〇一四年、ちくま学芸文庫）は、「鼓を打つ巫女に寄り添う表現を持つ点で二首は共通するが、二六五番が巫女への賞賛を、四七一番が巫女への同情を歌っている点で好対照をなしている」と評している。

- (10) 十四世紀初頭の成立と目される『普通唱導集』巻上 本二 世間部（村山修一氏編『普通唱導集【翻刻・解説】』、二〇〇六年、法蔵館）には、今様の歌い手である「白拍子」と並んで「鼓打」の表白文例が挙がっており、両者の関わりが特に深いことが推測される。また、注（3）中路氏論考も、この「なま女房」を『梁塵秘抄』流の芸事の覚えのある女であったにちがいない」とされているが、中路氏は呼びかけの相手を「鴨玉依姫神」とされ、ここから本稿とは意見を異にしている。なお、辻浩和氏『中世の〈遊女〉 生業と身分』（二〇一七年、京都大学学術出版会）は、中世における遊女に関する総合的な研究として示唆に富む。
- (11) 引用は新潮日本古典集成『和漢朗詠集』（一九八三年、新潮社）による。なお、久保田淳氏訳注『新古今和歌集 下』（二〇〇七年、角川ソフィア文庫）は、「この世の中はああ過してもこう過しても、所詮同じことだ。立派な宮殿も粗末な藁屋も、上は上、下は下で際限がないから」と現代語訳する。以下に挙例する「とてもかくても」の和歌においても、これと同様に現世のはかなさ、不条理を詠じているとみてよいだろう。

(12) 和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）による。

(13) 注（1）書「はじめに」による。

(14) 『一言芳談』には、この法語と同様の表現を有するものとして、他にも次のようなものがある。現世における「遁世」という振る舞いを「後世」と対比的に述べる発想も同様であると言える。

又云く、「真実にも後世をたすからむと思はんには、遁世が、はや第一のよしなき事にてありけるぞ。」

(15) 『発心集』第六「室の泊の遊君、鄭曲を吟じて上人に結縁すること。」「発心集」の引用は、浅見和彦・伊東玉美訳注『新版 発心集 上 現代語訳付き』（二〇一四年、角川ソフィア文庫）による。以下同じ。

(16) 『今昔物語集』巻第十九「讃岐国多度郡五位、間法即出語第十四」、引用は新日本古典文学大系『今昔物語集 四』（一九九四年、岩波書店）による。この主人公が「心極テ猛クシテ、殺生ヲ以業ス」と言われ、また「悪奇異キ悪人」ともされていることには、後で触れるように注意を払っておくべきである。

(17) 『古事談』第三一二五（新日本古典文学大系『古事談 続古事談』、二〇〇五年、岩波書店）。なお、『梁塵秘抄口伝集』には承安四（一一七四）年三月の巖島詣の際に、「正しき巫女」が後白河院に「今様を聞かばや」と求めた逸話があり、神前・巫女・今様の取り合わせとして興味深い。

(18) 引用は『神道大系 神社編 日吉』（一九八三年、財団法人神道大系編集会）による。以下同じ。

(19) 村山氏『比叡山史』（一九九四年、東京美術）「第一章

比叡の神々」による。

(20) 例えば『沙石集』巻第一ノ六「和光の利益の事」において地藏菩薩の救済を語った上で「…それも、諸社の中に十禅師、靈験あらたにまします。彼も本地地藏薩埵なり」（新編日本古典文学全集『沙石集』、二〇〇一年、小学館）と説くように、十禅師社の本地を地藏菩薩とする説は広く行われたようである。また、『岩波仏教辞典 第三版』（二〇〇三年、岩波書店）「地藏信仰」の項は、この信仰が「民間で盛んになり、地藏専修の例も出てくる」として、「地獄に入り、信者の苦を代わって受ける地藏の利益が、浄土往生の善根を積めず、墮地獄を恐れる民衆に受け入れられたためと思われる。春日若宮や日吉十禅師社などは地藏を本地仏とし、託宣の神として知られた」とも説明している。

(21) 引用は注（18）書に同じ。同書の解題によれば、「著者および著作年代ともに明らかでないが、室町時代に成立したと思われる」とのことである。

(22) 引用は注（20）書に同じ。なお、同書はこの「とてもかくても」を「ともあれ」と現代語訳する。しかし、これに続く「人身を受けたる思ひ出、仏法に会へるしるし」をともに現世での「思ひ出」「しるし」と見るならば、この「とてもかくても」は、先に述べたように蟬丸仮託の「世の中は」歌のイメージを引き継いで、現世のはかなさや不条理を匂わすべく用いられたと考えるべきであると思う。

(23) 引用は大橋俊雄氏校注『法然上人絵伝（下）』（二〇〇二年、岩波文庫）による。

(24) 注（10）村山氏編著によって確認できる。

(25) この三五五番歌について、馬場光子氏は『今様のこころとことば』(一九八七年、三弥井書店)所収「六 罪障の自覚」において、次のように評している。すなわち「…後に

謡曲「鵜飼」へと結実する、輪廻の罪などではない、生業そのものが罪であるという罪の意識によつて、初めて己が何者であったのかという自我に目覚めた、しがたない人びとの嘆きを鮮烈に歌う今様が生まれて来ているのである」。

(26) 網野氏『日本中世の非農業民と天皇』(一九八四年、岩波書店)のち、二〇二四年、上下二分冊として岩波文庫)所収「第六章 鵜飼と桂女」。岩波文庫版では下巻に収録。

(27) 横井氏『的と袍衣』(一九八八年、平凡社)のち、一九九八年、平凡社ライブラリー)所収「四 殺生の愉悦—謡曲「鵜飼」小考—」及び「付説4 「不殺生戒」について」。

(28) 注(27)書のうち、平凡社ライブラリー版の「四 殺生の愉悦—謡曲「鵜飼」小考—」による。

(29) 植木朝子氏『今様』(二〇一一年、笠間書院)はこの三三九番について「あてにさせておきながら通つて来ない薄情な男に投げかけた女の呪詛」とし、「この今様の主体が、水辺を漂泊する遊女であつたとすると」との留保付きながら「この今様の激しい怒りと呪いの底には深い悲しみと絶望が沈潜しているように感じられる」と述べている(注(9) 同氏著書も同様)。首肯すべきと思う。

(30) 馬場光子氏は、『走る女』(一九九二年、筑摩書房)所収「遊女の祈り」において『撰集抄』巻九—八「江口の遊女の事」を取り上げ、「女人として生きる遊女の行為」を「仏道に對置するもの」とし、自らの生業に対する遊女の「深い」

「否定の意識」に言及されている。これも首肯しうる指摘である。

(本学教員)